大塚敬節
矢数道明
責任編集

近世漢方医学書集成

39

和田元庸

名著出版刊

NANJING UNIVERSITY OF CHINESE MEDICINE
南京中醫藥大學
1954
南京中医药大学图书馆版权所有

近世漢方医学書集成 39
和田元庸
第II期 全30巻

昭和五十六年七月二十五日 発行

編者 大塚敬節
矢数道明

発行者 中村安孝

発行所 株式会社 名著出版
東京都文京区小石川三ノ十ノ五
電話東京(八一五)一二七〇番(代)
振替口座 東京七—一〇五四四番

予約限定版

製版所 株式会社 日本写真製版社
印刷所 有限会社 伊藤印刷
製本所 辻本製本所

落丁本・乱丁本はお取替えします。

3347—0890—8324

責任編集

大塚　敬節

矢数　道明

編集委員

山田　光胤

寺師　睦宗

大塚　恭男

矢数　圭堂

松田　邦夫

凡　例

一、本書第三十九巻「和田元庸」には、『三世医譚』『傷寒論精義外伝』を収録した。

一、本書は全て影印版によって収録したが、影印にあたっては次のようにした。

イ、新たに柱と頁数を付した。

ロ、底本を縮小し、一頁に半丁ずつ収めた。

ハ、裏表紙や記事のない白紙は省略した。

ニ、印刷不明な箇所は、他の版本等により補正したところもある。

ホ、傷寒論精義外伝の着色図版は、今回墨一色に変更した。

一、底本は次の通りである。

三世医譚　版本（文政九年版）　二巻二冊（大塚敬節所蔵）

傷寒論精義外伝　版本（文政九年版）　二巻二冊（慶応義塾大学医学情報センター所蔵）

一、解説は山田光胤（日本東洋医学会評議員）が執筆した。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook

和田元庸

小伝と解題

山田光胤

略歴

和田元庸は、吉益南涯門下の著名人として知られているが、それは『傷寒論精義外伝』の著書があるからである。その他の事跡は、著書『三世医譚』があるほかは、その名も不詳である。

元庸というのは、おそらく字(あざな)であろう。そのほかに、号を峯州園といったようで、『三世医譚』に、この号で自序を書いている。

生没年もやはり不明だが、『三世医譚』によると生まれた年はほぼ推定できる。それは、元庸が吉益南涯に入門した当時の事情が、大体つぎのようにのべられていることによる。

「二十五歳のとき、京へ上って和田東郭の門人になろうとした。ところが京へ着いてみると、東郭はすでに死去していた」とある。和田東郭の没年は一八〇三年（享和三年）だから、元庸が京へ上ったのがその一、二年後（一八〇四年頃）として、それから逆算すると、元庸の生年は、一七八〇年（安永九年）前後ということになる。

この時から十四～十五年後の一八一九年（文政二年）に、著書『三世医譚』に自序を書いているから、四十歳頃にはさかんに活躍していたことは確実である。更にその七年後の一八二六年（文政九年）に『三世医譚』と『傷寒論精義外伝』が出版された。後者には文政八年（一八二五年）の日付で南涯の縁者が序文をよせているが、自序がないのは、ことによるとこの書の上梓は、元庸の没後かもしれない。そうとすれば、和田元庸は比較的若死である。何れにしても確証はない。元庸の伝記とても別にないが、『三世医譚』により、その前半生についてはおぼろげながら知ることができる。

和田元庸は奥州盛岡藩・遠野の人である。家は代々医者をして、少なくも三代は続いていたと思われる。

十五歳のとき仙台へ遊学し、小山玄水について学問をした。傍ら梅津元泰に入門して医学を修め、五年後に帰郷したあと、東北各地を数年にわたって遊歴した。そのとき、疫病が流行したので自分の医術を試してみたが、治療が下手で多くの病人を殺した。そこで、また元甫（不詳）に

ついて李朱医学を学んだ。

ところが、宮古港へ遊歴した折、たまたま昔、元庸の祖父と昵懇だったという佐々木という人に会った。そして、その人から元庸が傷寒論に暗いことをつかれて、ばかにされた。そのときは、佐々木某の真意を知らず、ただ辱められたことを恨みに思いながら実家へ帰った。以来必死になって傷寒論の註釈書を古今にわたって読み、また自ら考究したあげく、医学については天下に恐れる者はないという自負を持つに至った。

そこで、京に上って更に勉強しようと決心した。ついては以前、元庸の父親が、和田東郭と師弟の約束をしていたので、父の添書を持って上京した。百余の宿場を過ぎる遠い旅をして、はるばる上った京であったが、東郭先生は先年、すでに死去してこの世に居なかった。そのときの元庸の落胆はよほど甚だしかったとみえて、三十七日間も宿屋の一室に居たという。

気をとりなおして、改めて弟子入りする師を捜そうとしたが、他人のすすめはあてにならないし、自分で捜すには右も左もわからない他郷で、ほとほと困り果てていたところ、神の助けか同郷の矼（いしばし）永俊という人に会った。

懐しさのあまり、一日一晩語り明かしたが、そのとき矼に、「君は今どなたに師事しているか」と尋ねられたので、「実はぜひ師事したいと思う人があって、こうして上京してきたのだが、その人は既に死んでしまっていた。だから今は、師事する人がなくて困っている」と事情を話したと

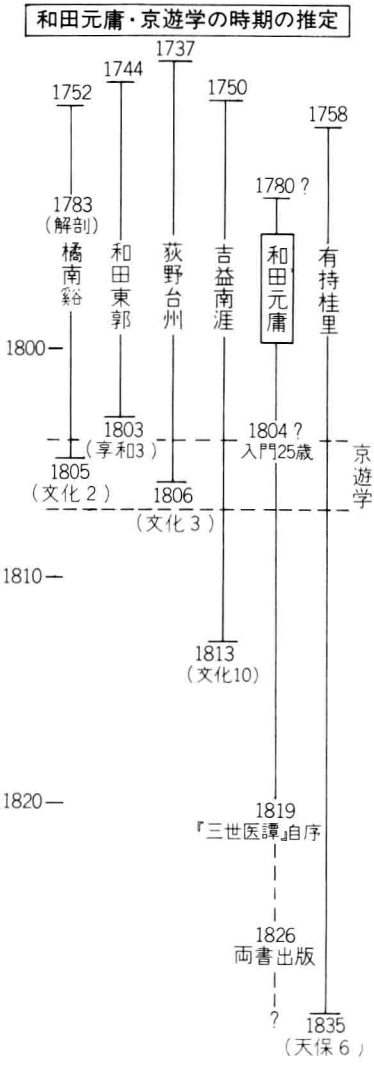
ころ、矼永俊に、「それでは吉益南涯先生に入門したらよかろう」とすすめられた。しかし、元庸が先に梅津元泰に習った医学は、南涯の父東洞の流派であり、それは脈を捨て、病名を除いて症状のみを採る激越な医風だった。これにはとてもついてゆけないから、嫌だと断わると、永俊が、「東洞先生はたしかにその通りだった。しかしそれは、後世派積年の陋習を打破するためには、あのくらいの激しさが必要だったが、今の二代目南涯先生は人柄は重厚で、教え方は懇篤だから、自分も入門したいと思っているくらいだが、いそがしくてまだその望みをとげていないのだ」というのであった。これを聞いて元庸は、永俊の言葉に真実を感じた。なんとならば、永俊は有名な中神琴溪に数年師事した弟子で、普通なら琴溪の弟子になるようにすすめるはずなのに、南涯をすすめるのは、師として南涯がよほど優れているからだろうと考え及んだ。

しかし、うっかり入門してから、意に反するようだと、変更もきかず困ると思ったので、南涯の著書を何か貸してくれないかと頼むと、永俊は快諾して『傷寒論精義』をどこからか借りてきてくれた。この書を一読して、元庸は南涯の弟子になろうと決心した。

和田元庸は吉益南涯に会って、すっかり私淑したらしい。南涯の風貌をこう云っている。「南涯先生、容貌雄偉、神彩人を射る。講席に就く威風厳にして、教示の旨高く、吾がさきに修する所の傷寒論の説、頑然として言を容るるの地なし。先生講授する所、奇偶の日を以てして年間金匱、傷寒論二書に止る。年中反覆すること、六、七扁、ないし十六、七扁にして、頗る得る所有る

に似たり。傍ら先生の人の死生を決し、沈痼（ふるいやまい）を摧くを見るに、吾が平昔学ぶ所と大いに異なる」と。これによると、吉益南涯は、年間を通じて金匱要略と傷寒論の二書だけを奇数の日と偶数の日に分けて、くり返しくり返し講義していたことがわかる。そして、それぞれが年間六、七回から十六、七回くり返されたようである。このことから元庸が、南涯の塾にいたのが、少なくも二年以上だったとわかる。

元庸はその後、荻野台州（一七三七―一八〇六）の処で瘟疫論を聴講したり、有持桂里（一七五八―一八三五）について薬方の応用を見学し、橘南谿（一七五二―一八〇五）に生理、解剖など漢蘭折衷を習うなど、当時の有名な医者の医術を得て帰郷した。なお、これらのことから、元



庸の京遊学はそれほど長くはなく、おそらく二、三年前後であったろう。元庸が京へ上った二十五歳の時を一八〇四年（文化元年）頃と推定したが、橘南谿、荻野台州の没年をみると、そう考えざるをえない（前頁表参照）。

和田元庸という人は、すぐに自信過剰となったらしい。『傷寒論精義外伝』の中では、しばしば中西深斎らの説を口をきわめて批判しているが、それも元庸の性格を表わしているように思われてならない。

京都遊学から帰った元庸は、自信満々で医者をやった。その様子を、こう記している。

「帰郷して自ら思えらく、吾れ東方の豪なりと。ここにおいて匙を采配の如くに押取り、病を小敵の如くに侮り、甘遂、巴豆、水銀、烏頭（いずれも劇剤）至らざる所なし」と。

それはちょうど、南涯に入門する前に、独学で傷寒論を読んで、天下に恐れる者なしと自信を得たときと軌をいつにしていたように思われる。

しかし、その結果は芳しいものではなかった。「或は忽ち愈え、或は愈えず、或は軽く見る者が劇しきに至り、或は劇しく見える者が易しく愈え、或は足もとから火の飛ぶが如きもの有り、或は長服すれども自若として病に益なく、殆ど向う所を知らず、ここにおいて家技（代々の家業）にあらずんば廃せん（廃業したいと思う）こと、しばしばなり」と正直に述懐している。

こういう点が、元庸という人の愛すべき人柄だったように思える。それ故にこそ、師の吉益南

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook

涯を無上に尊敬し、師の著書『傷寒論精義』を敷衍して『傷寒論精義外伝』を著したものであろう。

著　書

和田元庸の著書は、すでにのべたように『三世医譚』と『傷寒論精義外伝』の二書である。

『三世医譚』は、上下二巻よりなる医事随想集の如き書で、上巻には見識譚、択師譚、医道譚、劇易譚、医量を度る譚、逐機持重譚、観証譚などがあり、下巻には傷寒論譚、病因譚、蚘虫譚、望色譚、先天後天譚、本草綱目譚、病名譚などをのせている。

開巻第一に、「夫れ医の第一に心得べきは傷寒論なり、本朝の名医も、傷寒論、金匱要略に熟したる人は、治療極めて上手なり云々」とのべ、元庸の医学の基盤を示している。

そして見識譚のしめくくりに、「生涯医書を読めども、彼も一理なり、是も一理なりとて終年(生)其の見識の定まらぬ人多し、初学の徒よく省みてこの道に迷うことなかれ」とのべている。筆者はこの言葉に賛成する。

また、元庸は各所で吉益東洞を推奨したり弁明したりしている一方、香川修庵、戸田旭山その他の人達の批判を遠慮なくやっている。以上のべた如き立場からとも思えるし、また元庸という

人の性格も想像できて、面白い。

なお、元庸自身の伝記も、前述のようにこの書の中にみられる。

『傷寒論精義外伝』は、吉益南涯の『傷寒論精義』の敷衍をこころざした上下二巻の書で、精義に従って傷寒論を気・血・水説で解釈している。当時としてもいわば少数派で、それ故多数派と思われる中西深斎等を逐一批判し、自説を強調している点が目につく。

表裏内外について

傷寒論には、表、裏、内、外という言葉がある。これをのちに病位といっているが、この表裏内外の関係は、古来、諸説がある。

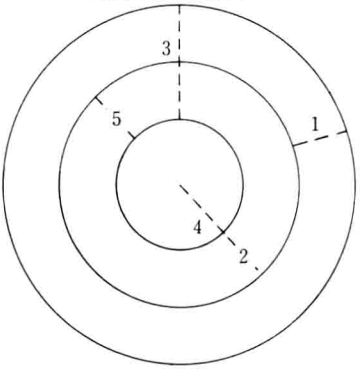
和田元庸はこのことに関し、図4の如く、表裏と内外を相対させ、外は表裏を合せたものとしている。そして、少陽病については、病位を論ぜず、証（症のことか？）によって「口苦、咽乾、目眩、この三証倶に気の変動にして水血の状無く、気特に裏に萠し、上昇して目眩を致す也、陽は進む也、陽病表に進まざる是れ乃ち陽情微少の証故に少陽病となす也」と規定している。敢えて解せば、少陽の病位を裏としているのである。

この説は、師、南涯の気血水説を尊重して、このような解釈に至ったものであるが、これは矢

表裏内外の図

図1．大塚敬節

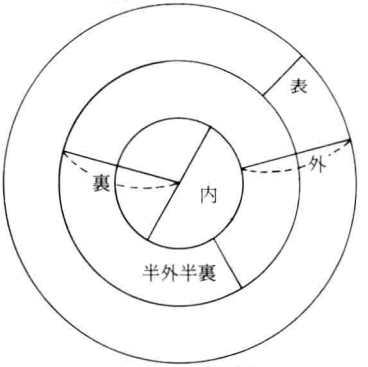
(『漢方診療の実際』)



1.表　2.裏　3.外
4.内　5.半外半裏

図2．大塚敬節

(『漢方の臨牀』3巻4号』)



半外半裏の図

図3．竜野一雄

(『生薬治療』11巻6号)

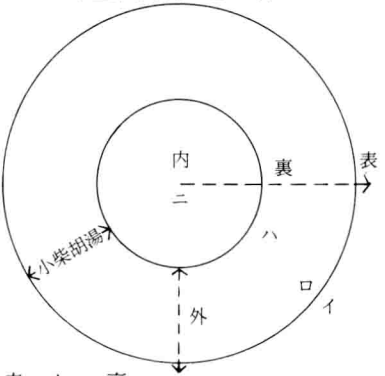
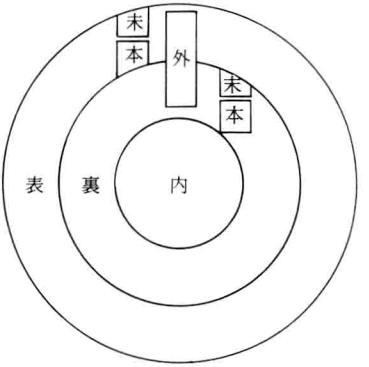


表　イ　　裏　ロ…ニ
内　小円内　　外　イ…ハ
小柴胡湯　ロ…ハ　半外半裏
半外半裏の図

図4．和田元庸

(『傷寒論精義外伝』)



表裏二部合して、之を外と謂う

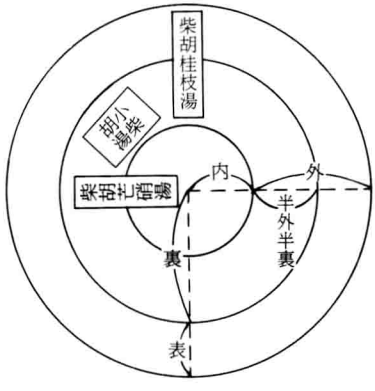
張り一家言といわざるを得ない。

表裏内外の関係と、少陽病の病位を理解する上で、最も説得力があるのは、吾が師大塚敬節先生の説であると筆者は信じている。

それは、大塚先生が『漢方診療の実際』[3]（大塚、矢数、木村共著）で初めて示され（図1）、『漢方の臨牀』[4] 3巻4号「外證未だ解せざる者」でも論じられている（図2）。

それより前、竜野一雄氏の説（図3・『生薬治療』[5] 11巻6号）があり、意味あいは大塚説と同様と思われるが、図にすると、大塚図の方が明確である。

図5．山田光胤



大塚先生の説を更にわかりやすいように、筆者が書き改めたものが図5である。即ち、身体の最も外表の部は表であり、その内側は裏でこれは内を含包している。その内は、裏の最も内側に位置し、これに対応する外は、裏の一部で内より外側の部分と、表を合わせた部位である。

これによれば、柴胡桂枝湯や柴胡芒硝湯の病位についての説明も明確になる（詳細は別に論ずる）。

少陽病の病位について

一般に少陽病の病位は、半表半裏といわれている。しかし、これは傷寒論の記載ではなく、成無己の『註解傷寒論』以来の用語といわれている。傷寒論には一〇七条「傷寒五六日、頭汗出で、微悪寒し、手足冷え、心下満、口食を欲せず、大便硬く、脉細の者は」と「小柴胡湯を与うべし、設了々たらざる者は屎を得て解す」の間の註釈文に「半ば裏に在り半ば外に在りと為す也」（康平本による）とあり、傷寒論にこの字句を求めるならば、これ以外にはない。

大塚先生は、この個所に注目されて、少陽病の病位は、半表半裏といわず、半外半裏というのが正しいと説かれて、表裏内外・半外半裏の関係図を作られたわけである。

この図（図1、2、5）にみる通り、半外半裏の位置は、外の一部と裏の一部が重なった部位である。即ち、少陽病の病位は、外でもあり裏でもあるといえる（以上、藤平健氏論文[6]より一部引用）。

傷寒論の薬方の由来について

和田元庸は、傷寒論は三代（夏、殷、周）の遺訓を張仲景が集録して、後世に伝えた書と云っている。近代の学者の多くの人達も、傷寒論が張仲景一人の著作ではなく、従前の医療知識の集大成であると考証している。しかし、医史学者・石原明氏や、東洋医学者・大塚敬節先生は、中国の医学が急速に発達した時代を春秋戦国時代と考証している。筆者もその説をとるものであり、三代の遺訓までさかのぼる元庸は、いささか考えすぎだと思う。しかし、これらの問題点の論証は繁雑にわたるので、この際は省略する。

ところで、この項の主題は、元庸が傷寒論中の薬方を、その名称によって古伝の方と張仲景の作方とに分けているもので、これは興味深い点があるので、簡単に紹介してみたい。

（一）先ず、薬方中の一味の薬物に代表させて呼ぶもの、例えば桂枝湯、大・小柴胡湯などは古伝の方で、多味で呼ぶものは仲景の作方だと云う。

（二）何何加何何湯と呼ぶもの、例えば桂枝加芍薬湯、桂枝加厚朴杏子湯、白虎加人参湯など、及び何何去何何湯と呼ぶもの、例えば桂枝去芍薬湯、柴胡去半夏加括蔞湯など、加去の字をつけたものは皆仲景の作方である。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook